

Ⅱ
― 2
ひとつの小説の前後

遠藤 周作

今の中西先生のお言葉どおり、私は梅原先生のずうっと昔からの大ファンでして、そして別の会で中西先生と一緒なものですから、このお二人の催される会からノーと言えるはずがございませんし、喜んでまいりましたけれども、ただし先ほどの李先生やクライナー先生のような立派な話とはとてもできないので、予めお断りしておきます。

中西先生が私の紹介はそこに書いてあるものを見よと、私も見ましたけれども、これは大体二十年くらい前の紹介でして、べつに大した問題じゃないんですが、私は自分で自己紹介します。

まず、私は小説家ですね。大説家ではありません。それから、二番目に私は戦争時代に青春を経た男です。三番目に、私は一応カトリックの信者ですが、信者ということになってますが、ときどき自分がカトリックか、あるいはトリックかというふうに考えることがあります。そして、今の三つ申し上げたことは、きょうの話でかなり重大な要素になりますので、覚えておいてください。戦中派であるということ、それから小説家であるということ、トリックかということ、もう二十何年ぐらい前に、私たまたま長崎に遊びに行きまして、いらっしゃった方はご存じでしょうが、日本で最初につくられた、私日本教会の中では一番美しいと思う、木造建築の大浦天守堂というところに見物に行きました。全く観光客として見に行ったわけです。

そこへ行きますと、ちょうど新婚夫婦とか、修学旅行の学生がたくさんにぎわってましたので、そこからしばらく離れたところに小さな記念館みたいなものがありまして、そこへまいりまして、たまたま踏み絵を見たわけです。皆さんご存じのように、踏み絵というのは木の

枠にピエタ、つまりキリストやマリア、十字架から降ろされたイエスを抱えているマリアの像がはめ込んだある踏み絵です。その端つこのところに、何か黒ずんだ個所がありまして、あんまりたくさんの人が踏んだので、中に油足の人がいて黒ずんだのかなと思って見ました。

そのときはべつにそういうことを深く考えなくて、東京に戻ってきたんですが、酒飲んでたり、それから夕方散歩なんかしているときに、フツとその踏み絵のことを思い出しましてね。というのは、先ほど申しましたように私は戦中派の人間ですから、その時代とその踏み絵の時代とを重ね合わせたんだろうと思います。自分が同じ時代に生まれて、仮に踏み絵を踏めと言われたなら、踏んだらうかと。そのころ、踏み絵を踏まないで、当人が殺されるだけじゃなくて家族も殺されるわけですから、その場合踏んだらうかと。

踏み絵というと縁が遠くなりますから、私はよく踏み絵のかわりにお前の思想を捨てなければ、お前の母親の顔を踏まなければ、お前及びお前の家族を殺すと言われたら、どうするだろうかというふう置きかえて考えますが、そのとき私の気持ちは二つありまして、一つはこれを踏まなかった人というのは実にえらい人だという気持ち、それは当然ですが、同時に、踏んだ人というのは、ものすごく足が痛かったらうと、踏みたくて踏むわけじゃありませんから、そのときものすごく足に痛さを感じたにちがいないと、これは当然思います。

それから、私は踏み絵を見たのはそのときが初めてじゃないんですが、そういうように心にひっかかるものがあつたというのは、小説を書く前にそういう心に引かかってくる、いつも何かがありまして、

それが初めになって小説が進展していくわけです。

友人を連れてたびたび長崎へ行きました。小説を少し書く気持ちになつてたんでしょう。雲仙という、今噴火しているあの山に行きました。あそこに地獄谷という硫黄がもうもうとうとして、そして熱湯があふれて流れているところがあります。当時、この踏み絵をどうしても踏まないという強虫は、ここへ連れていかれて、背中に刀で傷をつけて、如露で少しづつそこへ熱湯をたらして、そして小屋へ入れて回復するとまたそこへ連れてくるという、拷問をかけたという記録が残っております。

そこへまいりまして、今は修学旅行や、ゆでたまごのおばさんが盛んにゆでたまごを売ってますが、私行きましたときに、連れていったのが三浦朱門という小説家と、一人のカトリックの神父で、これは井上ヨウジという人です。三浦に、お前がもしここで、お前の信仰を、信念でもいいですが、捨てなければこの中につけると言われたら、どのくらいもつかないと尋ねましたら、ちょっと考えて、一分間ぐらいもつかないとかなんか言っていました。それで、だめなんだろうと言ったら、だめですと言っていました。

それから、井上という神父に聞きましたら、すごく怒りまして、そんなことわからんと、そのときにはものすごく怒りました。怒らない人だったんですが、そのときは怒りました。そんなことはわからんと言いましたね。私は、よかったと思いました。もしこれが、私は絶対自分の信念なんか捨てないなんて言ったら、絶交してやろうと思つて待つとったんですが、私の友達だけあつてうそつかなかったんでね。遠藤

お前はどうかと言われまして、私ここへ来ただけでもう気絶しとるからわからんと言つてね。

でも、そういうようなことを私が言ったというのは、小説を書く前には、皆さんが写真をお撮りになるのと同じように、カメラのポジションというのを決めようとしてたんです。小説はやみくもに書いていくんじゃないくて、自分の視点というものが、カメラでも視点というものを皆さんお考えになるでしょう。つまり、この場合の視点は、強い人のほうに視点を置くか、踏み絵を踏んでそこへ黒い指の足跡を残した、弱虫のほうに視点を置くかという問題でした。私は、ほとんどそのとき弱虫のほうに視点を置こうと思つた。なぜかというと、私が戦争中の自分を自己検証したら、恐らく弱虫に属する種族に入つとったからです。私としては、とても強虫にはなれない。私はまだ青年でしたけれどもね。

それで、東京に戻りまして、チースリックという、日本でもキリシタン学者で有名な先生のところに三浦と一緒に通いまして、多少勉強さしていただきました。私の興味は、自分の信念もしくは思想に殉じて、それを立派に守り通した人、この人ではなくて、踏み絵の上に黒い指の足跡を残した男たちのことを知れたからです。

しかし、どこの世界でも、そこで優等生というのは記録が残ってます。例えば、私は灘の出身ですが、私の成績は一八八人中一八六番で、今灘へ行きましたが私の記録はほとんど残ってません。だけど、優等生のことは先生は覚えておられます。教会の中でも強かった人、つまり殉教者というわけですが、そういう人についての記録は残っており

ます。幕府側もそういうものがある程度残しておりますし、それから教会側も持っている。しかし、弱虫についてはほとんど記録を持ってないので、チースリック先生が弱虫の代表の何人かを教えてくださったわけです。全部で大学ノート五枚ぐらいいしかありませんでした。五枚で五〇〇枚近い小説を書くというのは、天才的な才能を要するので、私はそれをやったわけなんです。

きょうお話するのはそういうことではなくて、黒い指の足跡を残した人たちがどういうふうになっていったかということであります。それは、なぜ私にとって興味があつたかというところ、まず私が先ほど言ったように戦争中の人間で、そして自分をそういうふうに規定するのはどうかと思いますが、強虫というよりはとにかく弱虫に属したわけですね。

それとまた、私は幼年時代からキリスト教という異文化体験をさせられた男です。そして、その中で、そういうキリスト教という一種のヨーロッパの宗教であるものを、私の意志ではなく、私のうちがそうだったわけですから、そういう異文化体験をさせられまして、私と私の中にある日本人というものの対立というか、なかなか調和しないということとずうっと苦しみまして、そのために小説を書き始めたような男でありますから、一体自分たちの三〇〇年前の人間たちは、どうしてそういう異文化体験を、あるいは異国の宗教を信じてできたのか。あるいは、どう受けとめたかということは、私にとって非常に興味があつたわけです。

よくNHKの放送で、九州の隠れキリシタンのことを放送いたしました

ですが、そのときNHKの解説者たちは、私の観点から言うと間違つて、彼らは強い意志を持つてキリスト教を信じてきたというふうに申します。しかし、この人たちは強い意志を持つてキリスト教を信じてきたのではなくて、毎年長崎地方で正月に踏み絵の行事を行います、そのとき踏み絵を踏んで生き残った人たちであります。ですから、これは私が言いますと、隠れキリシタンの人たちが及び九州の人たちは、非常に感情を悪くされますけれども、私はべつに踏み絵ということが悪いと思つてない男ですから、それで構わないじゃないかという気でそう言つてしまふんですが、それでなければ彼らはその後生きていけなかったわけです。

表は仏教徒を装い、そして自分たちの村ではキリシタンの信仰を密かに守つておつたわけです。この心理の中には、後ろめたさというのがまじつていなかったということは全くないんです。この後ろめたさという心理を自分の中に投影して、その気持ちは私はいつも自分の中に味わつてますから、隠れキリシタンを遠いものではなく、自分に引きつけて考えるのであります。

隠れキリシタンというのは、みんな仏教徒だと思われてました。事実は、ずうっと平戸とか、あのあたりの役人たちは知つてた人もいろいろでしたけれども、それを公にするとかえつて自分の職務にひびが入るので、黙認をしてた形跡もあります。しかし、幕末に大浦の天主堂ができました、長崎居留の外国人だけにその教会に通うことを徳川幕府が許しました。そのとき、沖繩からキラルカソンという船に乗つて、一人のフランス人の神父が長崎にやって来ました。プチジャンと

いう神父です。この神父は沖縄で、どうも日本人の隠れたキリスト教徒が潜伏しているらしいということを耳にして、それを探するために船に乗って日本へやってきたんです。

彼は大浦の教会の司祭になりました、馬に乗って長崎の市中を歩いたり、子供にお菓子をやりたりして、キシタンの子孫はいないかということを探ねて回りました。もちろん、みんな首を横に振るだけです。すっかり諦めた二年目の復活祭の日に、教会ができたというのが長崎のいろんな日本人が毎日のように見物に来るんですけれども、役人が絶対に中へ入ってはいけないと言ってるにもかかわらず、一組の集団がそうと忍び込んできまして、そして祈っているプチジャン神父の横に一人の女がそばに寄ってきて、サンタマリアの像はどこですかということをお聞きわけです。

それで、プチジャン神父があすこにと言つて、その像を指差します。今でも大浦の天主堂に行かれますと、そのサンタマリアの像が残っています。すると、彼らはそこへ行って、そして長崎弁でかわいたといった、それを聞いて神父はびっくりすると、今度は小声で同じ心にてござりますということを打ち明けるわけです。あなたと同じように、自分にはキリスト教徒だということです。

プチジャンはびっくりしまして、そしてカゼカシラ山という長崎の後ろに山がありますが、その山を越えて彼らの村を訪ねました。その村が、後に原爆の落とされた浦上村です。そうしまして、彼らの話を聞いてみますと、プチジャンがびっくりしたことに、彼らはキリスト教徒と、キシタンと言っているけれども、彼らの教えはキリス

ト教とあまり関係のないものがたくさん混じ合つて、仏教とか、神道とか、いろんな土俗的なものが混じ合っているものでした。それで、もう一遍教義を教えまして、再洗礼を受けさせます。再洗礼を受けさせて、彼らはまたキリスト教徒になるわけです。

ですから、隠れキシタンはキリスト教徒ではないわけなんです。キリスト教を変形した宗教です。長崎から車で一時間ぐらいのところに黒埼という町があって、ここへ行きますと半分はカトリックで再洗礼を受けた。これは隠れキシタンの村だったわけです。再洗礼を受けたキリスト教徒の半分は、隠れキシタンです。両者非常に仲が悪くて、私は隠れキシタンのうちへいろんなことを調べに行つたときに、その教会の神父さんから、決してあなたはキリスト教徒であるということをお断りしてはいけないと言われて、一升瓶下げてそこへ行きました。そして、私も小説のためならやむを得ないと思つたので、カトリックというのは実にくだらない宗教ですね、なんて言つてうそついで、そして彼らのオラショというのを教えてもらいました。

ですから、その村ではおもしろいんですよ、クリスマスを隠れキシタンのほうは陰暦でやります。カトリックは、キリスト教徒のほうは陽暦でやるんで、日が違うんです。お互いに結婚なんかしません。だんだん今は若い人たちができてきましたから、違つてきましたけれどもですね。

フランス人の神父が黒埼村へ行って、おれはパードレだと、昔神父のことをパードレと言つたのでパードレであると言つたら、その隠れキシタンのじいさまが、あんた違つと、われわれが祖先から聞い

てるパードレは、そんな格好しとらんかったと言われたんです。そのころのパードレは、スペイン、ポルトガルの宣教師ですから、縁の広い南蛮帽をかぶって、南蛮屏風に出てくる格好をしてたんでしょう。今の神父はローマン・カラーをつけていますから。それで、神父は長崎に戻って、昔の南蛮風の服装をわざわざこしらえさせて、帽子をかぶってまた黒埼村に行ったら、その年寄りがちよっと似とるがやっぱり違うと言ったんです。

先ほどの浦上村の話に戻りますが、プチジャン神父はそこで又一という男に、彼らの親父さん、おじいちゃん、その前の祖先から代々言い伝えがありますね、キリスト教義について。これを書いた文章をもたらってきます。「天地始まりのこと」という文章です。これは岩波の思想体系の二五巻に入ってますので、われわれも今活字で読めるようになってます。それを読みますと、プチジャンが甚だ奇怪な考え方をしていると云った理由が、よくわかります。

どういうことかと言いますと、いろんな個所があるんですけども、皆さんはよくご存じのように、イエスがベツレヘムに生まれて、そのときの王がヘロデ王で、そして博士たちがイエスが生まれたときヘロデ王のところに尋ねてきて、やがて師となるべき人間がきょう生まれたというのを教えます。それで、ヘロデ王が自分の王位をその子供にやがて篡奪されることを恐れて、そして領内の子供たちを殺してしまったということが新約に載っていますが、これは恐らく史実かどうかよくわかりません。現在、イスラエルとヘロデ王の大きな城跡が山の上に残ってます。

そして、皆さまご承知のように、普通キリスト教徒になりますと、イエスが神と人間との契約を破ったための人間の罪を背負って、死んだと、そして十字架につけられたと、聖ポーロの神学なんか大体そういう考え方でありましようけれども、そういう形になっているわけです。

ところが、この「天土の始まり」を見ますと、そんなことは全く書いてないわけです。どういうふうに書いてあるかということのを、ちよっと持ってきましたので読み上げます。

ヘレンの国にヨローテスという王がいた。彼はある日、隣国の三人の王さまたちから、この国へ天より御主ご誕生と承って参ったりと、だがヨローテスは何も知らず、その沙汰いまだ聞き申さずと答えたり。これは今私の訳ですからちよっとおかしいかもしれません。ヨローテスというのはヘロデ王のことです。なぜヨローテスというのかよくわかりません。ヨローテスは二人の家老、ポンシヤとピラト、これはわかりますね、ポンシヤとピラトというのは当時ユダヤ人を支配していた総督ピラトのことでしょう。それが家来になっちゃって、ポンシヨ、ピラトをよび、我が国へ天より主生まれたまえるよし、そのまま置れば己も汝らも追い払われてしまうというようなことを言うと、その家老たちは、いやあ、恐れることはありません。それじゃ、早速そいつを探し出してまいりましよう、そして探します。ですが、見つからなかったの、領内の子供四万四〇〇〇人を全部殺してしまった。やがてイエスが成長したとき、神がこの話をイエスに教えて、お前のために子供が死んだんだと、よって死んだ子供の慰めのために、お前

は命も苦しみ、身を澄まさねばならない。自分の心を澄まさねばならないと言われて、イエスはハッと平伏して、血のような汗を流したと書いてあるわけです。

私が興味を持ったのは、今私が申し上げましたような聖書の話というのは、べつにキリスト教信者でなくてもどなたもご存じの話です。それが、こういう隠れキリシタンの中にどうしてこのような形で変形したかという問題で、その屈折度というのを考えるならば、私はやはり日本人の持つ一つの宗教意識というものの一端が、分析されるんじゃないかというふうに考えたわけです。

これは、隠れキリシタンの村々を多少尋ね歩きましたけれども、現在残っている平戸にしろ、それから黒埼にしろ、僻地のなかなか人の行けないようなところにある島や、そういう僻地の島です。貧しい漁村です。そういう島では、食わんがために当然間引きをやります。子供を殺します、母親は。そうしないと、村の経済が成り立っていきません。ですから、今でもいろんな事情で子供をこの世に生まなかった母親が、水子地藏の前で手を合わせている以上に、これらの母親というのは、自分が殺さねばならなかった子供のことを考えたと思うんです。

小説家ですからこのあたりから推量になりますが、しかし今のような天土始まりのことの、イエスが死ななければならなかった話を、囲炉裏の端で父親や、あるいは夫から聞かされたそういう女たちは、我が身とイエスとを重ね合わせることができる。つまり、イエスも自分のために、自分が生きるために四万四〇〇〇人の子供が死んだという

んです。そして、自分も村と家族のために赤ん坊を殺さなくちゃならなかった。

宗教というのは分別や観念で信仰するんじゃなくて、無意識がそこになれば私は本当の宗教と思いません。後に、日本人でハビアンという僧侶上りの人が、「妙諦問答」というような本を書いて、彼はキリシタンになったのでキリスト教のことをいろいろ説明します。分別を持って説明します。意識的に説明します。しかし、彼は後にキリスト教を捨ててしまいます。つまり、思想というのは意識ですが、宗教というのは無意識ですから、意識の底に潜んでいるものでなければ、本当の宗教として根がつかないと思います。

これらの母親は、自分は自分なりに自分たちの悲しみ、苦しみを投影するように、キリストの生涯を変形していったんだと思います。当時のキリシタンというのは、プロテスタントじゃありませんから、聖書をあまり読みませんでした。チースリック先生は、聖書の全訳があつたと思いますけれども、切れぎれにはあつたでしょうけれども、カトリックはそのころ、プロテスタントのように聖書を非常に重視はしてませんでしたから、キリストの生涯がいかなるものかをどの程度知ってたかわかりません。しかし、この隠れキリシタンの場合は、さらにそれを教えるべき司祭教会もないわけですから、自分たちの悩みや悲しみの中でそれを変形していったので、それで今のような物語がつくられた。

つくられたというのはどういうことかと言うと、結局同じ傷口をなめあうイエスをそこに創造した。つくり上げた。あるいは、同じ傷口

をなめあうことですから、逆に言いますと自分たちの一番つらいこと、悲しいことを知ってくれる、同伴者というものをそこへ見つけようとしたということだろうと思います。

ですから、私はプチジャン神父がまことに奇怪な書と言ったこの土の物語というのは、日本人のある意味の宗教意識というものの一端を出すものではないかと思って、彼らのことをさらに調べようと思いました。

そうしますと、彼らの信仰の対象というのは、キリスト教の場合は神とかキリストでありまして、クライナー先生のいらっしゃる前でこういうことを申し上げるのは恥ずかしいのですが、マリア信仰というのが正規に認められたのはずうっと、ずうっと、ずうっと後のことでして、聖母マリアというものはカトリック教会の中でその地位を得るまで、長い歳月を要しました。しかし、日本の場合は逆でして、マリア信仰のほうへ重点がかかっていった。それは、彼らが持っている、何を拝んでたかというものの数を統計した、滝田先生という南山大学で教えられた方のご研究がありますが、その統計を見ましても、圧倒的にマリア観音が多かった。そして、例えばロザリオのキリストとか、そういうものはずうっと、ずうっと数が少ないんです。

そのマリア観音というのも、これはマリア観音として特別につくったものはほとんどなくて、だからよく骨董屋でこれがマリア観音ですというのは、大体福建省からきた子育て観音が主でして、マリア観音だと言われてお買いにならないほうがよろしいと思います。その福建省からきた子育て観音を、手を合わせて拝めばマリア観音なんで、拝

まなければ単に子育て観音になっちゃうわけです。こんなことを言うと、また長崎の骨董屋さんからしかられますが。あるいは、ひよっとした本当に特別にこしらえたのかもしれないませんが、そのところ私もわかりませんが、大体そうだろうと思うんです。

あるいは、彼らの持っているマリアさまの絵を見ますと、自分のおふくろのような野良着を着た、赤ん坊に乳房をふくませている。それを納戸に、つまり仏さんとかなんかを表に飾ったずうっと奥のほうへ隠して、そして拝んだ状態です。

私は、なぜこういうふうになっちゃったんだろうということを、当然考えます。彼らの心理を考えます。彼らの心理としては、いつも後ろめたいわけです。なぜならば、彼らは殉教できなかった。自分の信念を貫けなかった。踏み絵の上に黒い指の足跡を残して、生きていかなくちやならなかった。そういう人間にとって、後ろめたいという気持ちがいっつもある。

なぜ後ろめたいかという点、当時のキリスト教のいろんな教義の中に、「殉教の勧め」という本がありまして、当時キリスト教の迫害が非常に盛んになったときに出された本で、これは高山右近とか、そういう武将たちも読んだ本ですが、そこにこういうことが書いてある。

「世を渡るため、表向きばかりに転ぶと言いまでや、と云う者あり。心と言葉との違うこと、謀叛人の習いなり」と、つまり世間体のためだけに踏み絵を踏むと、それで本心は自分の信仰を守りますというような人がいるけれども、しかしそれは謀叛人と同じだというようなことを、「殉教の勧め」という本の中に書いてるわけです。

ですから、教会としては、教会は今の教会と違います。スペイン、ポルトガルの教会です。かなり激しい。特にイエズス会ならまだしも、当時フランススコ会とかサルジオ会が入ってくると、そういう強烈なことを信者たちに言ったんでしょう。

そういう自分たちの身近な中に、自分の信念を貫き通した人を目のあたりに見て、あるいは自分たちを教えてくれた神父が、自分の信念を貫いて殉教している姿を見て、後ろめたいと思わないのが不思議で、その後ろめたい彼らにとって、どういう宗教が必要かという、これは明らかに怒ったり、罰したりする宗教じゃなくて、慰めてくれる宗教です。ね。

これはエリック・フロムが言っていることですが、宗教には二つあると、父の宗教と母の宗教と二つある。父の宗教というのは、大ざっぱ言うと旧約聖書のように神が怒るイメージ、裁くイメージ、罰するイメージです。もう一方、母親の宗教というのは新約聖書のある部分にあらわれている。ご承知のように新約聖書には必ずしもイエスの言ったことを、そのまま述べたり、イエスのやったことをそのまま書いてる本ではありません。原始キリスト教団の信仰の反映ですから、そこに変形されたりいろんなものが入ってますから、でもそれからうかがっても、父の宗教の部分と同時に、それは非常に当時のユダヤ教にとっては革命的であつたと思いますが、母の宗教の部分が入ってます。つまり、慰めてくれる神、許してくれる神、一緒に苦しんでくれる神ということです。そういうイメージが出てきます。父親の宗教から母親の宗教へ移行したところに、キリスト教というものの一つ

の革命もあつたと思います。ユダヤ教の中で。

いずれにしろ、日本人の場合、私は父親の宗教というより母親の宗教というものが根づくのではないかと、これは梅原先生におうかがいしたい問題なんですけれども、少なくとも隠れキリシタンを、あるいは隠れキリシタンの信じているマリア信仰というよりはおふくろ信仰ですね、おふくろ信仰を見ると、それを感じざるを得なかった。必然的に、私の小説の中で踏み絵を踏む場面が出てきますけれども、そのときの踏み絵の中のキリストは、主人公に向かってこう言います。踏むがいいと、お前に踏まれるために私はこの世界に生まれてきたんだと、いうことをもうちょっと美しい文章で書いてありますが、そう言います。

そのとき、いろんな批評家がこの個所を取り上げて、遠藤は書いてはならぬことを書いたという批評家がありました。亀井勝一郎さんなんか、非常に危ない一線のところで、ここから右の足に行ったら綱渡りのところで落ちてしまう。左に行ったらまた落ちてしまうその瀬戸際を歩いて、ついに彼は書いてはならぬことを書いてしまったという批評をいただきました。私は、そのとき、そうですという気持ちはあります。あえて書きましたという気持ちはあります。

そのとき、江藤淳さんという批評家が、ここには日本人の母性体験があるということを批評の中で書きました。それを読んだときに、見破られたという感じがありました。つまり、日本人の母性体験です。というのは、山室賢明先生という方の、たまたま「日本人と母」という本を読んでまして、先生がいろんなアンケートをおとりになって、

それを整理して本になさったものです。その中には、日本人の母親に對する心理がいろいろ書かれているんですが、例えば母親は私を苦勞して育ててくれたのに、私は母親に報いることができなかった、それから私は何とか何とかあるんですが、山室先生の結論としては、いろんな民族の母親に對する意識の中で、日本人ほど母親を、生きてるときはべたべたしていやなやつだと思いますが、死んだあとに母親というものを神格化する民族は少ないように思うということ、その結論としてその本に書いてらっしゃる。

隠れキリシタンの場合も、私は彼らの感情、彼らの魂の悲しみ中でキリスト教という一神論の中に散華したんだと、私は若いころ、自分が日本人であつて、そしてたまたまカトリックということでありましたので、日本人というものの無意識とキリスト教の一神論というものが、對立するように若いころ考えてました。しかし、次第にその考えが變つてきました。つまり、一神論の中にはいろんな要素が入つて、というより多元的な宗教が入つて、というより一神論の中には神々が入つて、一神論の中には汎神論も含まれて一神論が形成されているんだという考え方です。

かつては一神論と汎神論というのは對立するかのごとく、日本の評論家や西洋のことについて論じられる方の間に言われてきたようですが、けれども、そうじゃくて一神論の中にはいろんな要素が入つて。つまり、神々が入つてるといふ考え方に、西洋の神学者たちも次第になつてきまして、これはキリスト教のイギリスの神学者なんかの本でも「宗教的多元主義」とか、「神はいろいろな顔を持つ」とか、あるいは

アミコルマンという、この研究所の教授でいらっしゃる河合隼雄先生がお訳しになった、「一の中の多」といふ論文の中にも同じようなことが書かれています。

そういう方向の中で日本のキリシタンのことを調べますと、今私はたまたま隠れキリシタンのことを申しましたけれども、例えばガラシャ夫人、あるいは小西行長、そういう人たちの中に信仰の軸となつたのはこの世がはかないといふ仏教的な考えでして、それ以外ほとんどありません。

例えば、細川ガラシャなんか、夫も子供も捨てて修道院に入りますと言ふので、神父にそういう考え方はキリスト教と全く違うんですけど、そういう俗的なものを捨てるといふことが信仰だと思わないでくれと、セスベレスという神父が書いてます。俗的な中で生きるということがキリスト教の信仰であると、そういう注意を促されてるんです。そういう考え方というのは、非常に浄土を求めて煩惱を捨てるといふ仏教的な考え方が、ガラシャの中にある。

それから、小西行長のように、これもまた後ろめたさといふことで生きてきた男です。時間がありませんので詳しく触れませんが、先ほどの隠れキリシタンと同じように、一度主を捨てて、しかし表は仏教徒を装いながら、密かにキリシタンを助けてといふ武将です。ですから、彼はやがて韓国に日本が侵略作戦をしたとき、攻め込みながら密かに平和主義、つまり面従腹背の態度をとります。しかし、この面従腹背の生き方というのは、私は実は日本のインテリの根本的な今までやった生き方ではないかと、いふふうには思つてゐるんです。このこ

とについては、時間ありませんからきようはやめます。

ただ、今言ったような小説を書いていますと、問題はどんどん、どんな発展して一つの小説を書く。その小説を書くのは、たった一枚の踏み絵でした。しかし、踏み絵というのが私の心を動かしたというのは、もともとそれが私の心を動かさねばならない何かが、私の心の中にあったんでしょう。そして、それがなかったら小説というのは書けないと思います。やっぱり小説というのは、無意識の仕事だと思いますから、意識的な仕事じゃないと思いますから書けないと思います。

最後に蛇足ですが、この浦上の連中は、このブチジャン神父のおかげでキリスト教徒になったため、幕末に捕縛されて日本国中に流されました。明治政府に入っても宗教政策はしばらくの間同じでしたから、同じように牢獄にずっと入れられたままでした。岩倉具視が使節となつて、日本とアメリカとの条約を改正するために渡米しましたとき、とこの將軍グラントが、近代国家というのは言論の自由と宗教の自由というものを認めなければ、近代国家ということは言えないのだということを演説しまして、岩倉具視は日本の憲法をつくるにあたって、宗教の自由ということを、それが後に実行されたかどうかは別ですけれども、とにかく宗教の自由ということで入れました。

そして、この浦上村の連中は再び国へ戻って、芋だけ食って貯金して、大浦の天主堂という大きな教会を自分たちの手でつくったわけです。日本の憲法の中へ宗教の自由を認めさせたのは、この浦上の信者たちのおかげでありまして、またそれを勧めたのは米国のグラント將軍のおかげであります。その米国の飛行機が落とした原爆は、ちょ

うどその浦上に真っ直ぐに落ちまして、中で祈ってた信者はすべて全滅、この浦上村という一つの村の歴史をたどっても、いろんな日本を考える深い意味があるように思います。

私の話は四時二十分で一時間、遠藤の話は普通一時間を過ぎるとおもしろくなると言われていますけれども、きょうは残念ながらあとのパートイがありますので、これで終わらなくちゃなりません。またいつかの機会にお話しさせていただきます。ありがとうございました。